

インド学仏教学は「社会的要請」にいかに応えるのか

斎藤 明

インド学仏教学の分野は(一) 国際的な学术交流、(二) 諸種データベースの整備、(三) 社会的要請への対応という点で、比較的、前向きに取り組んでいる人文・社会科学系(以下、「人文系」と略称する。)分野の一つである。しかし同時にまた、人文系諸分野に期待される今後の動向を見据えるとき、いくつかの課題に真摯に向き合い、関連する隣接分野とも協力し合いながら、着実に克服していくことが求められている。

まず、(一)の国際的な学术交流に関しては、人文系諸分野における研究評価の問題にも関わるが、すべての基幹となる全国学会では、主要な論文をすべて母語と英語とで同時発信する、あるいは過渡的に一年程度のスパンを置いて両語で公刊することが求められるであろう。現在のところ『印度学仏教学研究』は、第三分冊に欧文(主に英文)論文を収め、同時にまた第一、第二分冊に掲載されたすべての日本語論文の英文要旨を載せている。この状況を上述の方向にさらに進展させることは、ひとり日本印度学仏学会のみならず、人文系諸分野のすべての基幹学会に期待されている。

次に、(二)と(三)に関連して、広義の社会貢献という課題に目を向けたい。そもそも人文系諸分野はコスト・パフォーマンス(費用対効果)の点でも、日本の学術に多大な貢献をなしている。この点は、人文系分野全体に対する学術研究予算(約30%)に比して、同分野の学生数の比率(50%弱)、教育系を含めると60%弱)、工学系と並んで多い留学生の受け入れ、書籍の出版点数(約60%)等々の指標が示すとおりである(提言「学術の総合的発展をめざして―人文・社会科学からの提言―」(2017.6.1) 参照)。「コスパ」などの基準は人文系に馴染まないという声もあるが、人文系分野が涵養する柔軟で多角的な視野と批判的な思考法をもつことの意義にくわえ、江湖にうったえるに値する指標であり事実である。

ところで、学問分野の社会貢献には個々の研究者による研究成果や、それと関連した「宗教者」個人の社会的活動にくわえ、特定分野や隣接分野の複数の研究者が関与する作業をとおしての貢献もまたある。(二)の関連で、以下の二つのデータベースはインド学仏教学界が関与して作成されたもので、二十年以上前から公開され、内外の研究者・学生をはじめ、関心をもつ多くの人々に利用されている。その一つが、SAT 大正新脩大藏経テキストデータベース(「大藏経テキストデータベース研究会」東京大学大学院人文社会学系研究科・次世代人文学開発センター、<http://21dzk.1.u-tokyo.ac.jp/SAT/>)で、大正新脩大藏経(全100巻)のテキストデータベースである。他の一つは、INBUDS インド学仏教学論文データベース(日本印度学仏教学会、<http://www.inbuds.net/>)で、主として日本国内で発行された定期刊行学術雑誌等の中から、インド学・仏教学に関する論文を抽出し、その書誌情報及びキーワードを収録したデータベースである。これらの論文の中で、CINii、J-STAGE等に公開された学術雑誌所載の論文は pdf で入手可能である。

(三)の社会的要請への対応に関して、ここでは、手前味噌ながら、多くの難解な仏教術語を定義的あるいは主要な用例を根拠に現代語(日本語と英語)への基準的な訳語を提案しているパウツダコーシヤ(「仏教用語の宝庫」のタイトルをもつ科研費プロジェクト http://www.1.u-tokyo.ac.jp/~b_kosha/html/index_75dharma.html)を紹介したい。生物(有情)がもつ十の普遍的な心作用の一つマナスカーラ(manskara、妄染訳「作意(きい)」、真諦訳「思惟」)の例を挙げれば、『俱舍論』とその注釈における「心を「対象に向け」はたらかせる」ことである。「との定義文を根拠にするかぎり、適切な基準訳語は「傾注」ないし「心を向ける」とであり、英語の attention がこれに相当する。